



作 小泉八雲
イラスト 加藤 オズワルド

昔、武蔵むさしの国のある村に、茂作せさくとみの吉きちという、
二人のりょうしが住んでいた。

ある年の冬、茂作とみの吉は、いつものように山へ
りょうしに出かけた。

ところが、どうしたことか、その日にかぎって
え物がとれない。

茂作「…ん？」

(ゴオオオオ)

と、とつぜん

あたりが急に

暗くなり、

ゴオオオと山が鳴り

みるみるうちに

はげしい雪が

ふり始めた。



茂作もはく「みの吉きち！」

みの吉「茂作じいさん！」

吹雪ふぶきで真っ白になり、前も後ろも見えない。その中を二人は、はうように山小屋へたどり着いた。



茂作「今夜は、ここにとまるべ。」

みの吉「そうすべ。」

茂作むくとみの吉は、いろりに火をつけ、みのにくるま
つて横になった。年よりの茂作は、すぐにいびきを
かき始めた。しかし、まだわかいみの吉は、外の吹雪ふぶき
のおそろしい風の音が気になって、なかなかねつけな
かった。

(ゴオオオオ〜)

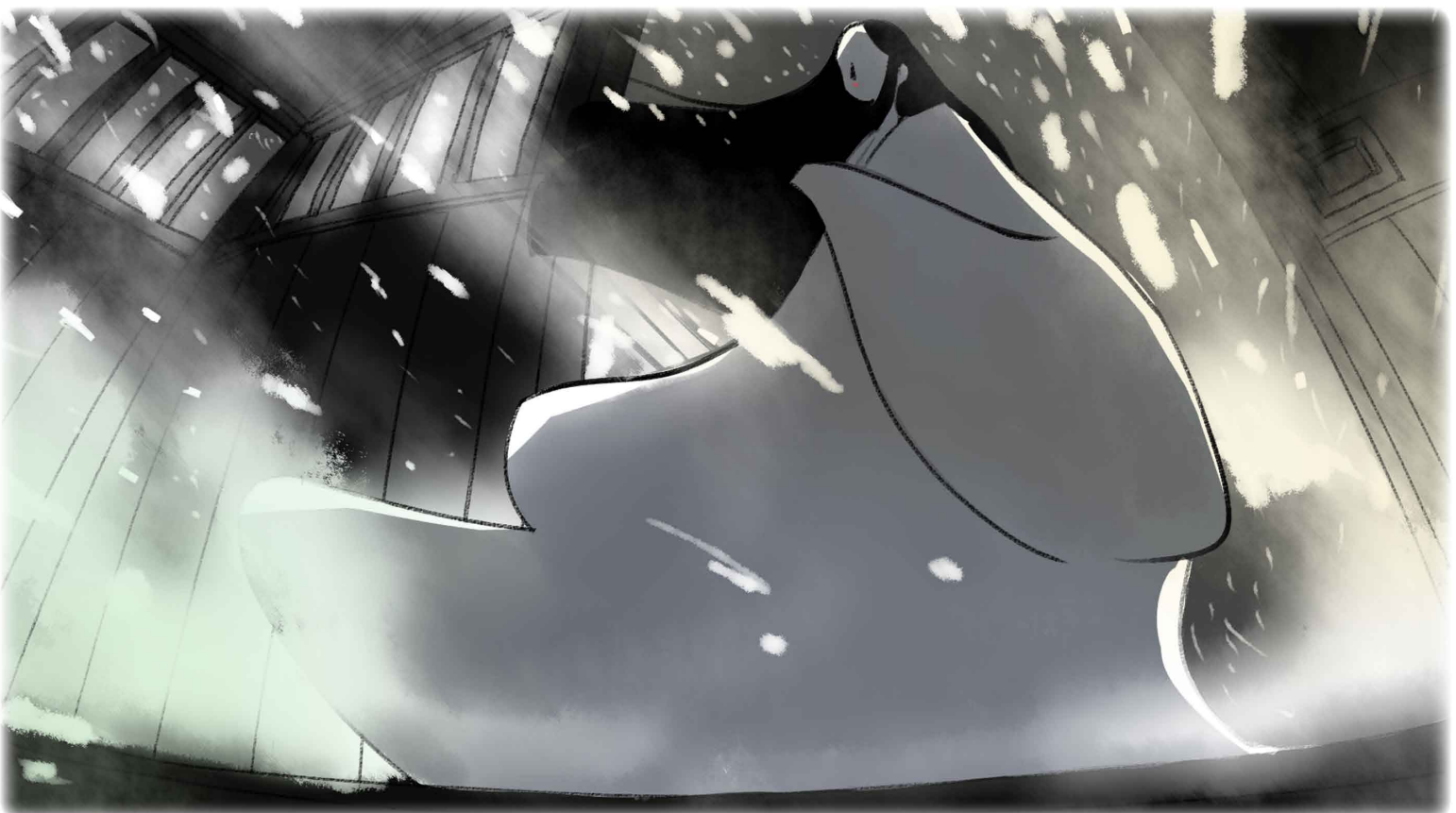


どれほどたつたろう。

みの吉「はっ…!」

ぞくつとするような寒さにおそわれ、みの吉は目を
さました。

そこには、白しろうぎくのわかいむすめが立っていた。



みの吉きち（だれだ！）

みの吉は、さげぼうとしたが声が出ない。起きようとしても、なぜか指一本動かすことができない。

むすめは、ねむっている茂作の上にかがみこむと、

雪女「ふうっ」

と、白くこおった息をふきかけた。

みの吉^{きち}（やめろっ！）

すると、むすめは、音もなくこちらに近づいてきた。

みの吉の上にかがみこむと、顔を近づけてくる。

その目はぞっとするほど黒く、おそろしい。しかし、

すき通るような、

白い顔はこの世の

ものとは思えない

ほど美しかった。



雪女「わたしはお前が

気に入った。だから

今は、命は取らない

ことにする。

だが、今、見たことを決して人に言ってはならない。
もし言ったときには、お前の命はないと思え。やくそ
くしたぞ…。」

みの吉^{きち}「…はっ、じいさん！ 茂作^{せきく}じいさん！」
すでに茂作は、ごおりついたように息たえていた。



そうして一年がたった、やっぱり吹雪ふぶきの夜のことだった。

(トントン)

みの吉きちは、

みの吉「いま時分じぶん、だれだべ…。」

と、戸を開けると、なんとも美しいむすめが一人しょんぼりと立っていた。

お雪「旅の者ですが、

道にまよってなんぎ

しております。今ばん

一ばんとめてもらえま

せんか。」

みの吉「そうか。そら

こまったことだな。」

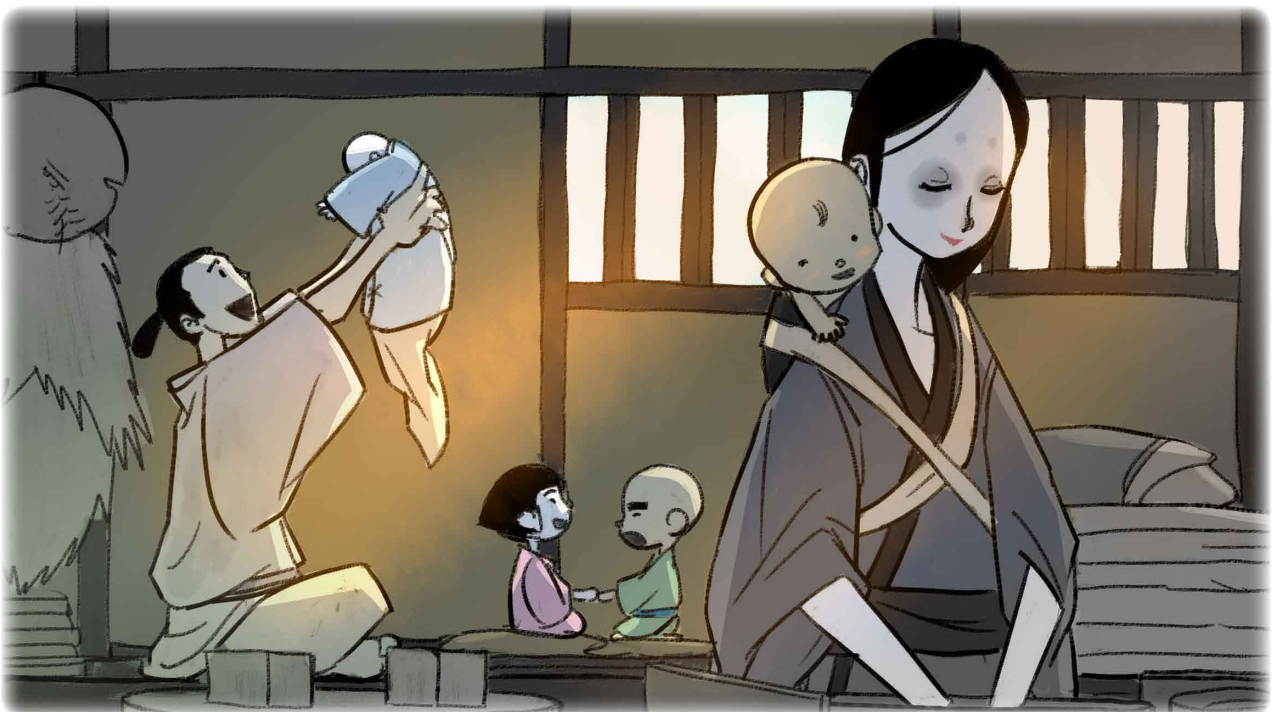
みの吉は見るに見かねて

中へ入れてやった。



むすめはお雪という名で、身よりもないという。
みの吉は、このお雪に、知らず知らず心ひかれていっ
た。
それから雪は、七日の間ふりつづいた。そうこう
するうちに、お雪は村に住みつき、みの吉のよめさん
になった。

お雪は、美しいだけ
でなく、よくはたらく
いいよめさんだった。
二人の間には、
つぎつぎ子どもも
生まれ、幸せな日
つづいた。



ただひとつ、ふしぎなことは、お雪はお天道様てんとさまがきらいで、昼間は決して外へ出ないことだった。

こうして何年かたった、ある冬のこと。この日もや
つぱり吹雪ふぶきの夜だった。

みの吉きちは、お雪の横顔を見るうちに、ふと、茂作もさくじい
さんがなくなった、あの日のことがうかんできた。

みの吉「思い出すですよ、あのばんのことを。」

お雪「あのばんのこと…。」

みの吉「茂作じいさん
が死んだばんのことだ。

あのばんも、今日みた
いな吹雪だった…。」

みの吉は、あの夜のこと
をはじめて口にした。
しかし、いっぺん話し
始めると、止まらなく
なって、何もかもお雪に
話してしまった。



みの吉きち「だども、ふしぎなこともあるもんだ。お前は、あのばんの女にようにとる。あの、おそろしい黒い目、まっ白い顔…。あれは、もしかしたら、おら、雪女ではねえかとな…。」

みの吉が、そこまで言ったときだった。

(ジュウウウ〜!)



雪女「とうとう、言ってしまったな。」

決して言うてはならないとやくそくしたのに、お前はやくそくをやぶったな。」

みの吉^{きち}「お、お雪…。」

雪女「そうだ、お前が言うとおおり、わたしは雪女だ。

命をもらうやくそくだが、子どもらがふびんだから、命だけは助けてやる。

これで、わたしたちはおわかれだ…。」

みの吉「お雪…。」

雪女のすがたは、あとかたもなく消えてしまった。

そして、二度とそのすがたを見た者はいなかったという。



おわり